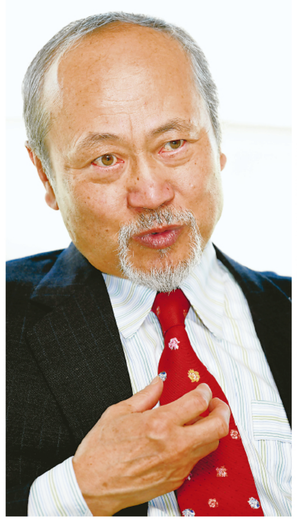
絹谷幸二賞の軌跡

若手作家の夢と力信じ

芽が出た時 手助けできれば

絹谷 幸二

きぬたに・こうじ 1943年奈良市生まれ。東京芸大大学院了。74年に安井賞受賞。89年毎日芸術賞。2018年大阪市に絹谷幸二天空美術館が開館。日本芸術院会員。文化功労者。



アトリエ訪問し選考

絹谷賞の対象は35歳以下。国内で開催の展覧会に出品された、具象絵画の絵画を選考する。現在選考委員を務める金沢21世紀美術館（金沢市）の島敦彦館長はこの10年を振り返り、「若手作家たちを勇気づける賞になった」と意義を語る。

選考では、全国の美術関係者や美術評論家、ジャーナリストから寄せ推薦を基に、3人の選考員が2度にわたって審査する。絹谷さん自身は選考に一切関わっていない。

特徴は2次選考に進んだ候補者について、可能な限りアトリエを訪問し意見交換しつつ選考にあたるということ。直接会って制作に対する思いや、作品の背景を把握することができる。選考員は数年ごとに入れ替わるため、「評価軸が少しずつずれることで、作品の多様性につながった」（島さん）。

この10年間の受賞者は本賞・奨励賞合わせて20人。受賞を機に展覧会に招待されたり、個展を開催したりと大きく羽ばたいている。

海を超えた活躍を

橋爪 彩

はしつめ・さい 1980年東京都生まれ。2008年東京芸大大学院修士課程絵画専攻（油画）修了。後、ベルリンやパリにも滞在。

――今後の目標を教えてください。

橋爪 日本だけでなく海外でも見てもらえるような作家になりたいです。制作に時間がかかるので、何とかして枚数を描いて、作品をためて海外で大きく展開したい。今は、そのための種まき的時期です。将来的に国際展で作品を見せたいですね。目指す作家としては、美術家ではないですが、シンガー・ソングライターのケイト・ブッシュのようになりたい。カリスマ的で、孤高な存在にあこがれます。

桑久保 将来のことは何も考えたことはないんです。絵を描くのはつらいんですけど、でも描くんでしょうね。この生活が続けばいいかなということでしょうか。一方で、大型展を除くと、全体的にオーディエンス（観客）が少ないのは寂しいです。映画みたいに、見に来た人間が感想を共有できればいいのにと思います。これ面白かったねとか、つまらなかったねとか、カジュアルに話せるような場所があればいいですね。

絹谷 みなさんにはチャンスに向かって思いっきり作品を作ってほしいです。私は今年、10月に北斗市の北海道・近代美術館で個展が控えています。10月から日本橋を皮切りに始まる高島屋の巡回展でも、新作を発表します。左手を痛めていますが、死ぬまでにいい仕事を残したいという思いでやっています。

受賞者ら座談会

若手画家を支援し、具象絵画の可能性を開いことを目指した絵画賞（毎日新聞社主催、三井物産協賛）は第10回の今回をもって終了する。10回を記念し、過去の受賞者を改めて紹介すると同時に、賞の果たした役割について振り返る。また受賞者にとってどのような意味を持つかについて、賞の創設を呼びかけた画家の絹谷幸二さんと、第3回受賞者の桑久保徹さん、第5回受賞者の橋爪彩さんに当時の思いや、近年の活動について語ってもらった。

【司会・学芸部編集委員 永田晶子、まとめ・高橋咲子、写真・宮本明登】

――受賞の吉報をお聞かせください。また、受賞はどのように糧になりましたか。

桑久保徹さん 受賞はシンプルにうれしかったです。いただいから選考方法を知りましたが、非常に公平な審査基準だと思いました。公募展は1点勝負のことが多いのですが、絹谷賞は個展やグループ展など総合的な成果で評価してもらえる。また、賞金を頂いたおかげで時間に余裕ができて、その分絵が描けるのがうれしかったですね。

橋爪彩さん 東京芸大学院修了後、ヨーロッパ留学から帰国したのが2010年でした。帰国後、欧州での制作や、学んだことを踏まえて、自分の表現をどのように確立するか手探りしていた中で、3・11（東日本大震災）が起きました。作品を制作していたのが、「フローラ」という作品です。この時代の作家としてのありかを模索していた時期だったただけに、受賞は背中を押されました。

――絹谷さんは賞創設のきっかけとして、ご自身が安井賞を受賞され、非常に助けになったとお聞きしています。

絹谷幸二さん 第17回安井賞をいただいた時は当時最少の31歳でした。それまで可能に登場してきたので、若手を応援するために何かできればいいなと思いました。ただ、資金は提供するけれど、審査に加わらない10年でした。帰国後、欧州での制作や、学んだことを踏まえて、自分の表現をどのように確立するか手探りしていた中で、3・11（東日本大震災）が起きました。日本の芸術が全体として底上げされればいい、という思いで、そういうふうに時々言葉を発しました。

――絹谷さんは賞創設のきっかけとして、ご自身が安井賞を受賞され、非常に助けになったとお聞きしています。

絹谷幸二さん 第17回安井賞をいただいた時は当時最少の31歳でした。それまで可能に登場してきたので、若手を応援するために何かできればいいなと思いました。ただ、資金は提供するけれど、審査に加わらない10年でした。帰国後、欧州での制作や、学んだことを踏まえて、自分の表現をどのように確立するか手探りしていた中で、3・11（東日本大震災）が起きました。日本の芸術が全体として底上げされればいい、という思いで、そういうふうに時々言葉を発しました。

――受賞者ら座談会

橋爪彩さん 東京芸大学院修了後、ヨーロッパ留学から帰国したのが2010年でした。帰国後、欧州での制作や、学んだことを踏まえて、自分の表現をどのように確立するか手探りしていた中で、3・11（東日本大震災）が起きました。日本の芸術が全体として底上げされればいい、という思いで、そういうふうに時々言葉を発しました。

――絹谷さんは賞創設のきっかけとして、ご自身が安井賞を受賞され、非常に助けになったとお聞きしています。

絹谷幸二さん 第17回安井賞をいただいた時は当時最少の31歳でした。それまで可能に登場してきたので、若手を応援するために何かできればいいなと思いました。ただ、資金は提供するけれど、審査に加わらない10年でした。帰国後、欧州での制作や、学んだことを踏まえて、自分の表現をどのように確立するか手探りしていた中で、3・11（東日本大震災）が起きました。日本の芸術が全体として底上げされればいい、という思いで、そういうふうに時々言葉を発しました。

――受賞者ら座談会

橋爪彩さん 東京芸大学院修了後、ヨーロッパ留学から帰国したのが2010年でした。帰国後、欧州での制作や、学んだことを踏まえて、自分の表現をどのように確立するか手探りしていた中で、3・11（東日本大震災）が起きました。日本の芸術が全体として底上げされればいい、という思いで、そういうふうに時々言葉を発しました。

――絹谷さんは賞創設のきっかけとして、ご自身が安井賞を受賞され、非常に助けになったとお聞きしています。

絹谷幸二さん 第17回安井賞をいただいた時は当時最少の31歳でした。それまで可能に登場してきたので、若手を応援するために何かできればいいなと思いました。ただ、資金は提供するけれど、審査に加わらない10